日常生活と民主主義と教育をつなぐ理論

久保　健太
関東学院大学教育学部専任講師

エリクソンをヒントに

エリク・H・エリクソンは、人生の初期に、「基本的信頼basic trust」「自律性（自己決定）autonomy」「自主性（主導権）initiative」の感覚が育まれると述べた。この3つの感覚は、民主主義の主体が備えるべき要件でもあるし、人間が幸せに生きるための条件でもある。その意味では、これらの感覚は子どもに保障しさえすればいいものではなく、子どもを含めた人間全員に保障されるべきものでもある。本稿では、エリクソンの理論を参照しながら、基本的信頼、自律性、自主性の感覚どうしがもつかかわりや、発達の順序性について論じる。

さて、教育（あるいは、人の育ち）は学校でのみ行われるものではないし、民主主義も投票所や議会でのみ行われるものではない。教育も民主主義も、人間が営む日常生活の一瞬一瞬の中で生まれたり、生まれ損ねたりしている。

くぼ　けんた
東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。修士（教育学）。教育哲学。篠原学園専門学校こども保育学科学科長などを経て現職。
共編著に『保育のグランドデザインを描く』（ミネルヴァ書房）、『育ちあいの場づくり論』（ひとなる書房）、『子ども・子育て支援と社会づくり』（ぎょうせい）など。

いわば、日常生活と民主主義と教育はつながっている。私にとって、そのつながりに気づかせてくれる言葉が、エリクソンの「信頼」「自律性」「自主性」といった言葉である。これらの言葉は、日常の一瞬一瞬の中に民主主義を生み出す際のヒントにもなっている。

我が家には2歳と0歳の娘がいる。私のゼミには、20人の若者がいる。私がアドバイザーを引き受けている法人、自治体、株式会社が15箇所ほどある。私は、親として子どもの学びにかかわり、教員として学生の学びにかかわり、アドバイザーとしてメンバーの学びにかかわっている。その際に、エリクソンの言葉や考え方をヒントにしている。

以下、日々の生活のなかで、私がどのようにエリクソンの理論を参考にして、どのように人の学びにかかわっているのかを紹介するが、人生の初期にあたる「乳児期」「幼児期初期」「遊戯期」「学童期」の個別の話を始める前に、エリクソンの発達論の全体像を示しておく。

人間の育ちを長い目で見る

図1が、エリクソン自身が作成した「エピジェネティック図式」と呼ばれるものである。この表において、人生は乳児期から老年期までの8つの時期に分けられている。そして、それぞれの時期で生じる葛藤が記されている。例えば、第一期（乳児期）では、基本的信頼と基本的不信との葛藤が生じる（その

図1

	1	2	3	4	5	6	7	8
老年期 Ⅷ								統合 対 絶望、嫌悪 **英知**
成人期 Ⅶ							ジェネラティビティ 対 停滞 **世話**	
前成人期 Ⅵ						親密 対 孤立 **愛**		
青年期 Ⅴ					アイディンティ 対 アイディンティ混乱 **忠誠**			
学童期 Ⅳ				勤勉性 対 劣等感 **有能感**				
遊戯期 Ⅲ			自主性 対 罪の意識 **目的**					
幼児期初期 Ⅱ		自律性 対 恥、疑惑 **意志**						
乳児期 Ⅰ	基本的信頼 対 基本的不信 **希望**							

（出所）Erikson1982：56-57 ＝ 1989：73 より作成。

詳細は後で述べる）。その葛藤を乗り越えることで、希望という「人間的な強さ（徳）」が開花する。エリクソンに言わせれば、人生とは、葛藤を通じて、人間的な強さ（徳）を開花させるプロセスである。この表には人生において生じる８つの葛藤と、人生において開花する８つの人間的な強さ（徳）が記されている。

本稿では、このうち第四期までについて論じる。第四期までの育ち（学び）を素描すれば、次のように書ける。

第一期：応答してもらえるという信頼感・安心感を培う。

第二期：信頼感・安心感を土台にして、自己決定をする。

第三期：自己決定を土台にして、自分（たち）がイメージする世界を、自分（たち）の手で（自分たちが主導して）つくっていく。

第四期：自分（たち）の世界をつくる際に、仕上がりにこだわるようになる。そのこだわりを土台にして、道具・技術・知識を獲得する。

以上が第四期までの育ち（学び）の大まかなイメージである。学びとは、技術や知識を獲得することだ、と思っている方は驚かれるかも知れない。しかし、エリクソンの教えに従えば、そうした学びを急いでやる必要はない。むしろ、安心を培い、自己決定を励まし、主導権を認めるということをしさえすれば、自分たちの世界をつくるために技術や知識を獲得しようとする。

私は、この考え方に出会ったおかげで、人の育ちを長い目で見ることができるようになり、子どもにゆったりと向き合えるようになった。というのも、この考え方が教えてくれるのは、第四期までに四つくらいのことを身につけておけばいいんだよ、という気長なメッセージだからだ。

以下、娘と私との日常の様子を交えて、エリクソ

ンの考え方を紹介する。

第一期：自分(たち)は応答してもらえる存在なんだ

私は、自分の娘や学生の心の中に「希望」が開花するように願っている。辛い経験の中で、自分に対する自信が傷ついたり、人に対する信頼が損なわれたりしたとしても、生きることに対する「希望」が根づいている状態にしておいてやりたいと思っている[1]。

そのために、娘の欲求表出に出来る限り応答しようとしている。エリクソンは、「赤ちゃんの個別の欲求を敏感に配慮すること（sensitive care of the baby's individual needs)。それを通して、子どもの中に信頼感を創りあげていく」と述べている(Erikson1959:60 = 2011:65)。また、「母親的人物とは、新たな存在がもつ摂取や接触の欲求に、暖かく穏やかに包み込むように、応答する人物である。(respond to his need for intake and contact)」とも述べている(Erikson1964:116)。ポイントは、欲求表出に、個別に、応答することである。

0歳の娘にとっては、泣くことが欲求表出である。私は、その欲求表出に応えるようにしている。そうして「だいじょうぶだよ。お父さんは、君の望み(希望)に応えようとするよ」というメッセージが伝わるようにしている。

応答とは、離れずに側にいることではない。むしろ、離れても、呼ばれたら(赤ちゃんが泣いたら)、側に戻ること。それが応答である。そうした応答を繰り返すことで、娘の中に「離れても、呼べば、戻ってきてくれる」という信頼感が培われる。これは「この人は応答してくれる人だ」という相手に対する信頼感だが、それに加えて「私は、他者に応答してもらえる大事な存在なんだ」という自分に対する信頼感が培われる。その両方が、基本的信頼の中身である(Erikson1959:63=58)。

繰り返すが、応答とは、離れないことではない。むしろ、欲求表出に応答できる範囲で離れることであり、離れても、欲求表出に応えて戻ることである。言い換えれば、距離を縮めることではなく、伸び縮みさせることである。そのような伸び縮みを繰り返すことで、離れても大丈夫だ、という信頼を培う。

こうした応答は、年齢を重ねるにつれ、様々な形態をとる。「貸しても、返してと言えば、返してくれる」「譲っても、やりたいと言えば、自分の番が来る」「困っても、助けてと言えば、助けてもらえる」。これらはいずれも、応答のヴァリエーションである。

という話を授業でしていたら、学生のひとりが「恋愛において、束縛の強い人は、信頼よりも不信の強い人なんですか」と質問した。そうなのである。束縛の強い人は「離れたら戻ってこないかも知れない」という不信(不安)が強く、「離れても、戻ってくる」という信頼（安心）を上回っている。エリクソンは信頼について、次のように書いている。

「乳児が成しとげる最初の社会的行為は、母親が見えなくなっても、無闇に心配したり怒ったりしないで、母親の不在を快く受け入れることができるようになることである。それは、取りも直さず、母親が予測できる外的存在になったばかりでなく、「内的な確実性」をもつようになったからである」(Erikson1950:247=1977:317)。

束縛の強い人が、相手が見えなくなった途端に心配や怒りがこみあげてくる人だとしたら、それはまさに不信である。

大事な点を伝え忘れたが、エリクソンは、第一期で信頼が獲得されたら、その信頼が一生続くとは考えない（Erikson1959:181=237)。第一期の信頼と不信のせめぎ合い(葛藤)、つまり、応答してもらえるんだという信頼（安心）と応答してもらえないかも知れないという不信(不安)とのせめぎ合いは、一生続くと考える。

私の2歳の娘は、家庭という小さな社会で基本的信頼を培った。その娘は、1歳になったときに保育園という未知の社会に入っていった。そのとき、あらためて第一期をたどり直す。それは小学校に入ったとき、中学校に入ったときも同様である。「新たな地平を拡げるとき」、人は第一期をたどり直す(Erikson1964:117)。そのときに、乳児期に信頼を培っていたかどうかが影響する。

未知の社会に入り、「新たな地平を拡げる」という経験は、人生の中で、何度も繰り返される。その

ときに、自信をもって踏み出せるようにしておいてやりたい。娘の欲求表出に応答するのが億劫なほど疲れているときは、そう考えて、応答するようにしている。

第二期：自分（たち）のことは自分（たち）で決める

娘は徐々に、寝返りをするようになり、ずりばいをし、ハイハイをし、あっという間につかまり立ちをして動き回る。その頃から、イヤイヤ期が始まる。イヤイヤ期は「自分のことは自分で決めたい」という自己決定の欲求が盛んになる時期である。この自己決定の欲求のことを、エリクソンはAutonomy（オートノミー）と名づけ、先人たちはそれを「自律性（の感覚）」と訳した。

娘にイヤイヤ期が来たときに、妻に「イヤイヤが収まらないってことは、親のしつけが出来てないってことじゃなくて、娘が健康に第一期を乗り越えた証拠なんだから、親は、イヤイヤ言っている我が子を見ながら、自分の子育てを褒めればいいんだよ」と話したら、「その言葉に救われる親は多いと思う」と言われたので、子育てサークルなどで話をするときは、そのメッセージを伝えるようにしている。

この考え方は、実際にエリクソンの理論が教えてくれるものであって、人は、第一期で培った信頼・安心を土台にして、第二期で自己決定をするのである。

とはいえ、メッセージがそれだけでは、イヤイヤ期の子どもに手を焼いている親御さんの参考にならない。私自身は、広げたら広げっぱなし、出したら出しっぱなしの娘に対して「広げたら、たたんでほしい」「出したらしまってほしい」という言葉を伝えるようにした。これはエリクソンに言わせれば、「期待」を伝えるというやり方である。

第二期は、自己決定と恥とがせめぎ合う時期である。エリクソンは「恥とは、自分が完全に人目に曝され、また見られていると意識していること、要するに、自己意識的であることを意味している。人は見られる存在であり、見られる準備のできていない存在である」と述べている（Erikson1959:71 = 68）。ここでのキーワードは「人目」すなわち「（他者の）視線」である。

ここでのエリクソンの示唆を、子どものイヤイヤを抑えるために「応用」するならば、子どもを視線にさらすことで、本人に恥を感じてもらうという方法がある。しかし、そのやり方では「あまりに恥をかかせると、正しくあろうとする感覚ではなくて、見られていないなら何でもやって上手く逃げてしまおうという、秘かな決意が生まれる」ということにもなりうる（Erikson1959:71 = 69）。

そこで私が参考にしたのは「成熟しつつある人間は、周囲に期待できることと、自分に期待されていることに関する知識を、徐々に、組み込むようになる」（Erikson1964:119）という一節である[2]。

イヤイヤを抑えるためには「視線」にさらすよりも、「期待」を伝える方が前向きである。だから私は、広げたら広げっぱなし、出したら出しっぱなしの娘に対して「広げたら、たたんでほしい」「出したらしまってほしい」という期待を伝えるようにしている。

この点については、山竹伸二が『子育ての哲学』の中で述べている「三つの承認パターン」の話も、大いに参考になった。山竹のいう三つの承認のうち、二つを紹介すると、その二つとは、①ありのままの自分が無条件に認められる承認、②できるようになったことを「できたね」と評価し、ほめる承認の二つである（山竹2014:90-91）。

これは、①が第一期の「応答」、②が第二期の「期待」に対応する。実際、２歳の娘を見ていると「みてて、みてて」ということをさかんに言う。そういうときはたいてい、私が「たたんでほしい」といったものをたたむことができるようになったときだったり、しまってほしいといったものをしまうことができるようになったときだったりする。そのときの娘の心の中をのぞけば「いまから、お父さんの期待に応えることをするから、うまくいったらほめてね」という気持ちなのだろう。

ということは、いまイヤイヤ期を生きている娘の心の中には「自分のことは自分で決めたい」という気持ちと「お父さんの期待に応えたい」という気持ちとがせめぎ合っているのだろう。

ここでは「自己決定と恥のせめぎ合い」を「自己決定と期待のせめぎ合い」と読み替えている。エリクソ

ン自身は、恥という否定的感覚も、それがあるからこそ、葛藤が生じるのだというふうに、肯定的に考えている（Erikson1959:181=237）。第一期では信頼が、第二期では自己決定が肯定的感覚と呼ばれるものである。一方で、第一期では不信が、第二期では恥が、それぞれ否定的感覚として生じる。肯定的感覚と否定的感覚の両者が生じるからこそ、その間に葛藤が生じ、かつ、葛藤がダイナミズムを保つのである。いわば、否定的感覚は、必ずしも否定的にばかり働くのではない。そのことを示すためには「恥」という言葉より、「期待」という言葉を用いた方が適当であるので、そのようにしたのである。

第三期：自分（たち）の世界をつくる

イヤイヤ期まっただ中の娘とも、これまでとは違うかかわり方ができるようになってきた。それは約束をしたり、見通しを共有したりというかかわり方だ。

例えば、食事の最中に遊びたいと言い始めても、「食べ終わったら遊べるよ」というふうに、食べた後の見通しを共有できたり、「食べたら遊ぼう」という約束をできるようになってきた。これは第三期に入りつつある証拠だ。

第三期になると「集団の中での役割」がわかったり（Erikson1964:121）、作業全体の中での今の作業がわかったり、つまりは「時間的見通し」がもてたりするようになる（Erikson1964:120）。実際、最近の娘は、生活のなかで役割を担おうとする。私と妻が食べ終わった食器を片付けていると、一緒に片付けようとしたり、片付けた食器を洗おうとしたりする。

第二期までは、目の前で起きていることや、目の前にいる相手に引っ張られがちだったのに対して、第三期になると全体を見通せるようになり、その全体の中での「役割」がわかるようになる。

それは遊びの仕方にも変化をもたらす。例えば、ごっこ遊びにおける「お父さんイメージ」「お母さんイメージ」がとても豊かになってくる。マイ・ワールド（自分の世界）が豊かになってくる。最近、娘は、マラカスをマイクにして、自分の世界でステージに登り、一生懸命、歌を歌っている。そのうち、友達どうしで、それぞれの「自分の世界」を持ち寄って、「自分たちの世界」をイメージできるようにもなるのだろう。

第三期では、イメージが豊かになる半面、事実という「取り返しのつかないもの（不可逆なもの）」に対する認識もシビアになってくる（IErikson1964:121）。自分のイメージする世界を、自分の手で、事実としてつくることはとても楽しい。しかし、自分の手で、事実をつくっていくことによって、その事実をつくる前の世界には戻れないということも分かってくる。これが不可逆の感覚である。

加えて、自分がつくった事実が「全体」に影響を及ぼすことも分かってくる。それが罪悪感（罪の意識）になり、自分の手で、自分の世界をつくることをやめさせてしまうことだってある。

信頼、自己決定、自主性が、お互いを土台にしながら深くかかわっていることは再三述べた。それと同様に、不信、恥、罪悪感も深く関わっている。不信も、恥も、罪悪感も、失敗を恐れるという点で一貫している。すなわち、失敗しても（失敗したら）応答してもらえないだろう（助けてもらえないだろう）という不信（不安）は、第二期には、失敗してはいけない（期待に応えなくてはいけない）のに、期待に応えきれない――しかも、その姿を人目にさらさなくてはいけない――という恥ずかしさに変わり、第三期になれば、失敗したら、そのしわ寄せが全体に及んでしまう（だから、手を出すのはやめておこう）という罪悪感を生み出していく。

第四期：道具・技術・知識を獲得する

最後に、第四期についても、簡単に触れておこう。というのも、第四期こそが「学び」「教育」の一般的イメージに最も重なる時期だからである。第四期になると、自分の世界をつくる際に、仕上がりにこだわるようになる。すなわち、いい仕事をしたいと思うようになる。あわせて、いい作品に仕上がったときの喜びを感じるようになる。そうしたこだわりや喜びを土台にして、道具・技術・知識を獲得する（Erikson1964:123-124）。

フィンランドの教育学者エンゲストロームは、学習の段階を、1．欲求段階、2．ダブルバインド、3．対象／動機の構成、4．適用、一般

化、5. 強化、反省の5つの段階に分けている(Engestrom1987:150＝235)。そのエッセンスを汲み取りながら、私は、上の五段階を次のように書き換えている。

1. やりたい!、2. やりたいけど、できない、3. やった!できた!、4. いつでも、どこでも、できるようになる、5. できるようになったことが周囲に変化を及ぼす。

エンゲストロームは、この五つの段階をくりかえしながら、学習が進むのだと考える。エリクソンの理論は「できないけど、やりたいからやる!」という前向きさを培う際に参考になる理論である。不信や恥、罪悪感が強いと「やりたいけど、やらない」ということも十分起こりえるからである。

エンゲストロームは、上の五つの段階のうち「やりたいけど、できない」という第二段階をもっとも重視する。その段階において、様々な方法を試し、うまくいく方法を獲得するからである。方法を獲得することが学びだとしたら、第二段階こそが、学びを生み出すキモなのである。

このとき、子どもが方法を獲得する仕方には、三つのレベルがある。第一は、教えられたた方法を獲得するレベル。第二は、自分なりの方法を、自分の引き出しからもち出すレベル。第三は、自分の引き出しになかった方法を編み出すレベル。学びは、おおよそこの三つのレベルのうちのどこかで起きている(Engestrom1987:111-114＝163-168)。

民主主義と教育

次の時代を生きる世代を、第二、第三のレベルでの学びを出来る人間に育てておいてやりたい。第一のレベルは、人工知能を搭載したロボットが人間以上にうまくやってしまう時代でもある。そのためにも、本人が「やりたい!」と思ったことを、安心して、自分で決めて、自分の手でできるように育ってほしい。

また、そのような学びを、周囲の人間と協力しながら進めていけるように育ってほしい。つまり、自分たちの引き出しになかった方法を、自分たちで編み出し合うような学びを進めていってほしい。アイデアを出し合って、新しい方法を編み出し合うことは、それが「やりたいこと」であれば、楽しいはずであるし、そうして自分たちの引き出しを増やしていくことは、「生き方の幅」を増やしていくことにもなるはずだ。それは「自分(たち)は応答してもらえる存在なんだという信頼感」「自分(たち)のことは自分(たち)で決めるという自己決定」「自分(たち)の世界は自分(たち)でつくるという主体性」を中身とした民主主義の実現でもある。そのための種は、人間の中に埋め込まれているので、まずは日常の一瞬一瞬において、その種が開花するようにかかわってやることをしようと思う。

とはいえ、私は、民主主義を、日常の心がけのレベルにとどめていいとは思っていない。民主主義を社会全体に拡げなければいけないと思っている。

エリクソンは「地平を拡げるときに、応答がなされることで、希望が再確認される」と述べている(Erikson1964:117)。いつか娘たちは、家庭という地平から、地域という地平、あるいは学校という地平へと、その活動を拡げていく。そのときに、新しい場所で、第一期からたどりなすことができるような、そういう社会をつくっておいてやりたい。その点からすると、今の日本の課題が見えてくる。安心も不十分なままに「視線」「評価」に晒されること(私自身もやってしまいがち)。「評価」を面と向かって言われるならまだしも、本人の知らないところで陰口を叩かれること。そういったことを失くしていったり、自動車の危険にさらされることなく自分の活動を拡げていけるような環境を整備してやったり(久保2006)、そういったことを一つ一つやっていこうと思う。最後に、子どもを含めた人間全員が信頼感、自己決定、主体性の感覚を日々味わえるようにすること。そうして、一人ひとりが、葛藤(せめぎ合い)を通じて、人間的な強さ(徳)を開花させていくこと。こうした社会の実現も大きな課題である。■

《注》

1 「人生が維持されるのだとすれば、自信が傷つき、信頼が損なわれたとしても、希望は残っているはずである。」(Erikson 1964：115)

2 この一節からは、子どもは周囲からの期待を一方的

に伝えられる存在ではなくて、子どもからの期待を周囲に伝えることも許された双方向的な存在なのである――という子ども観（人間観）を読み取ることもできる。

《文献》

Engestrom, Yrjo（1987、2015）*Learning By Expanding* Cambridge University Press ＝ エンゲストローム（山住勝広ら訳）（1999）『拡張による学習』新曜社

Erikson,Erik.H（1950）*Childhood and Society* W.W.Norton & Company.＝ エリク・H・エリクソン（仁科弥生訳）（1977, 1980）『幼児期と社会Ⅰ、Ⅱ』みすず書房

Erikson,Erik.H（1959）*Identity and the Life Cycle*、W.W.Norton & Company.＝ エリク・H・エリクソン（西平直・中島由恵訳）（2011）『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房

Erikson,Erik.H（1964）*Insight and Responsibility*、W.W.Norton & Company.（同書には、鑪幹八郎氏による邦訳がある。『洞察と責任［改訳版］』誠信書房、2016年）

Erikson,Erik.H（1982）*The Life Cycle Completed,* W.W.Norton & Company. ＝エリク・H・エリクソン（村瀬孝雄・近藤邦夫訳）（1989）『ライフサイクル――その完結』、みすず書房

久保健太（2006）「「道路分化」という道路文化の構築に向けて――子どもが育つ場としての道路「環境」の論理的必要性――」『こども環境学研究』第２巻１号

山竹伸二（2014）『子育ての哲学』ちくま新書。